

共同研究 ● 音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に（2011-2014）

本共同研究チームは1945年までに東アジアで発行されたSPレコードの内容分析に取り組んでいる。人の声を録音するという営みの背景には様々な理由があるが、SPレコードの録音内容を調査しているうち、営利を目的としないレコードの存在に気づいたのである。

### レコードの誕生

蓄音機とレコードの発明に伴い、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、人々の音楽を聴く習慣は大きく変化した。レコード会社は録音技術を利用して様々なジャンルの音楽を吹き込み、レコードを商品として売り出すようになった。また、レコード会社は消費者の好みにも応えるようになり、消費者を満足させる企画を行なった。これらのレコードは、「生産者と需要者の間に立って商品を売買し、利益を得ることを目的とする」いわゆる商業用レコードであり、その発展史は多くの研究者に注目されてきた。

そもそも、1877年にトーマス・A. エジソン（1847-1931）によって発明された初期の蓄音機、フォノグラフは、エジソンが作った電話機の延長線上に位置し、伝言板のような、声や音を記録する機械を作ろうという彼の発想から生まれたものであった。つまり、フォノグラフの原点は「記録」をすることにあった。事実、上記の商業的レコードとは異なり、声を記録することが目的で吹込まれた非商業的レコードも数多く存在している。本稿はこのような背景を踏まえ、非商業用レコードがどのような意図を持って吹込まれ、その存在にはどのような意味があるのかを考察することを目的とする。

### 非商業用レコードの事例：記録・保存のための録音

1945年以前に録音された非商業用レコードの事例として、ここでは植民地台湾（1895-1945）で日本人が行なった録音を以下の2つのカテゴリーで紹介する。

#### ①言語学者の場合

まず、言語学の研究のために早い段階で台湾に渡った人物に北里闈（1870-1960）がいる。北里に関する1980年代の研究成果によると、日本語の起源を探すため、彼は1920年から5年間を費やし、沖縄、台湾、フィリピン、マレー半島など、

東アジアと東南アジアの諸地域へ調査旅行に出かけている。その間の1921年と1923年に台湾に2度渡り、台湾先住民の言葉と音楽を記録した。当時使われた録音機器はエジソンが発明したものと同種類の蝸管式蓄音機であった。それらの蝸管は現在大谷大学に所蔵されており、その復元作業は大谷大学の依頼で北海道大学応用電気研究所が行なった。

第2の事例としては、1930年代に言語学者浅井恵倫（1894-1969）が録音した台湾先住民の言語のレコードがある。浅井は、言語の研究のために1923年に台湾の蘭嶼に渡り、その後、先住民族、ヤミ族の言葉の研究が評価され、1936年に台北帝国大学（現国立台湾大学）の助教授、翌年教授になった人物である。1947年まで台湾に滞在した。浅井は、言語学

者で当時台北帝国大学の教授であった小川尚義と一緒に台湾先住民の言語を調査し、記録・保存の作業を行ったが、レコードは浅井個人によって録音されたと考えられ、そのレコードは現在東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）に所蔵されている。2005年にAA研が主催した小川・浅井コレクション展示会の関連ホームページの説明によると、当時の録音はレコード盤による録音で、録音の際には大きなラッパ状の集音機が必要とされたようである。レコードには、台湾の平野地域に住んでいたバサイ、カバラなど「平埔族」4族と、ブヌン、ルカなどの「高砂族」8族の言語が記録されている。

これらの録音は約100年前に行なわれたものであり、これらを通して1920-30年代の台湾における少数民族の言語の研究することが可能である。特に「平埔族」の言語はほとんど消失しており、これらの音声は多くの研究者の注目を集め、現在も盛んに研究が行なわれている。

#### ②民族音楽学の場合

言語だけでなく、音楽も記録の対象となった。1945年以前に台湾で実施された音楽の録音のうち、比較的知られているのは田邊尚雄によるもの、そして樹源次郎及び黒澤隆朝の2人によるものであろう。田邊は1922年4月1日から同月21日まで台湾に滞在し、西海岸に居住するタイヤル族、パイワン族、サオ族の歌や器楽を中心に調査した。その際、田邊はラッパ付きの携帯式蓄音機を購入し、自らそれに蝸管式の録音装置を取り付けて写声機を作り、それを台湾に持ち込んだ。



田邊尚雄がフィールドワークに使用した録音式蓄音機（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター伝音アーカイブズ所蔵、2011年9月29日、劉麟玉撮影）。

田邊が当時録音した曲数は21曲であった。

榎と黒澤は、1943年の1月から5月まで、台湾の漢民族と先住民族の歌と器楽を幅広く調査し、録音した。実際に吹込み作業を担当したのは榎と黒澤ではなく、同行したビクターの録音技師、山形高靖であった。録音された曲数は310曲にも上った。それらの原盤と作りだされた26点のSP盤レコードはビクター本社に保管されていたが、空襲によりすべてが焼失し、唯一残されたのは黒澤の手元にあった編集用の1セットであった。そのセットの所在は現在明らかでないが、黒澤の著書や関係資料から、少なくともヤミ族以外の先住民族（高砂族8族と平埔族1族）と漢民族の音楽が含まれていたことが分かる。

当時、これらの資料は大衆向けレコードとして録音されたというよりは、音楽学者が植民地台湾の音楽に興味・関心を持ち、吹込んだものといえる。これら2つの調査によって得られた音源の重要性は多くの研究者に認められ、これらの調査で録音された台湾先住民の音楽は1970年代に黒澤によってリリースされた。

### 非商業用レコードの事例：政治家による演説録音

政治家の演説を録音したレコードはレコード会社によって制作されたものではあるが、「生産者と需要者の間に立って商品を売買する」という消費者の好みに応えるものではなく、むしろ吹込み側の意志が全面的に打出されたものといえる。そういう意味で前述した2種類のレコードと同様、非商業的レコードの類である。当時は記録のためというより、むしろ宣伝の意味合いが強かった。

日本では、大正時代にすでに尾崎行雄や大隈重信などの政治家が自分の政見をレコードに吹込んで有権者に配ったという記録が残っている（倉田2006:99-103）。植民地台湾にも類似した宣伝用レコードが存在する。台湾コロムビアによって発行された第17代台湾総督小林躋造の録音である。

これは1938年4月1日に台湾総督府官邸にて行なわれた出張録音で、小林躋造の2つの演説が吹込まれ、それは「島民に告ぐ」（発売番号80404）と「青年に告ぐ」（発売番号80405、A面）の2枚のレコードとなった。戦時下の自覚を台湾人に喚起する目的で吹込まれたものである。録音の状況については2日後の4月3日の『大阪朝日新聞台湾版』で詳細に報道されている。「総督さんもレコードスターに」と題された記事である。その内容の一部を原文のまま紹介する。

「一階会議室を応急吹込室に仕立て、午前中から廣谷社会課長その他が再三テストを行ひ、準備万端OK、午後三時すぎ、小林総督が姿を現はし、カメラマンの乱写のなかに最後のテストをすませ、エロキューションの注意などを聴取したのちいよいよ同三十分日本コロムビアの檜山技師の操作によって本吹込みを行ひ午後四時ごろ完了した」と記されている。同記事によれば、この録音は4月末に製品化された後、各州庁、郡、市街、庄（植民地台湾の自治体の単位）に配布され、台湾コロムビアからも台湾全島に売り出す予定であった。檜山技師のフルネームは檜山保といい、後に日本コロムビアのレコード部長、取締役を歴任した人物である。また、檜山の所属は「日本コロムビア」と書かれているが、正式社名は日本蓄音機商会（現日本コロムビア株式会社）であった。日本コロムビアに残されている「選曲通知書」によると、台湾コロ



小林躋造がレコードに演説文を吹込む様子（1938年4月2日『台湾日日新報』（漢珍数位図書公司出版）第7版より）。

ムビアは日本蓄音機商会に上記の小林が吹込んだ「島民に告ぐ」を2,300枚、「青年に告ぐ」を1,500枚制作依頼し、またこれら2種類のレコード50枚ずつを台湾総督府東京出張所にも送ったようである。

ちなみに、中国の政治家で日中戦争中に南京国民政府を樹立し、主席となった汪精衛の、広東語による演説録音も幾つか残されている（発売番号30405-30410、音声は日本コロムビア会社斎藤藤氏による提供）。これらも1939年10月に日本蓄音機商会によって発行されたものであり、日中間の連携により平和を実現することを訴えた内容となっている。

### 声を蓄えて百年後に聞く

日本にフォノグラフの現物が伝わってきたのは1879年のことである。当時の人々にとって、レコードは音楽メディアとしてヒット曲を誕生させる以前に、声を残す手段であった。その手段が言語学者や人類学者、民族音楽学者といった人々の目にとまり、現地調査では蓄音機を用いて言語や音楽の録音が行なわれるようになった。また、録音は政治家の意見を周知させるための手段にもなった。実際に肉声が聞こえる方が、新聞という伝達手段よりもインパクトがあり、くり返して群衆に聞かせることができるという利点もあった。1897年の東京日日新聞にはフォノグラフが「人の言葉を蓄へて、千里の外、又は十百年の後にも発することを得る機械」という説明があったようである（倉田2006:4）。音声レコードに吹込んだ人物たちは、それらを後世に伝えるというよりは、むしろ目の前のことで精一杯だったのかもしれない。しかし、これらの音声の1つ1つがメッセージとなり、私たちにその時代の真実をリアルに語ってくれている。

### 【参考文献】

倉田喜弘2006『日本レコード文化史』岩波書店。

### りゅうりんぎよく

奈良教育大学教育学部准教授。専門は音楽教育学、民族音楽学。著書に『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』（雄山閣2005年）、論文に「ウオグ・ヤタウユガナ（高一生）の作品のルーツを探って—植民地台湾の音楽教育と先住民音楽の観点を通して」『奈良教育大学紀要』60(1)（2011年）など。